児童虐待防止全国ネットワーク　第25回シンポジウム
「メンタルヘルス問題のある親による子ども養育世帯への支援を考える」

実施報告（要旨）

主催：児童虐待防止全国ネットワーク（子ども虐待防止オレンジリボン運動総合窓口）
後援：内閣府、厚生労働省、文部科学省、一般社団法人日本子ども虐待防止学会、
　　公益財団法人SBI子ども希望財団、読売新聞社、他
日時：2017年1月22日（日）13時00分～16時40分
会場：星稜会館（東京都千代田区永田町2-16-2）

子ども虐待に関わる実務者からは、メンタルヘルスに問題を持つ親への対応が難しいという声が聞こえてくる。子ども虐待においては在宅支援のケースが圧倒的に多く、その中でもメンタルヘルス問題を抱えた家庭とどうかかわり、支援していけばよいかを考えるため、この方面の第一人者の方々を迎えてシンポジウムを開催した。

基調講演では、県立広島大学保健福祉学部准教授である松宮透髙氏に「メンタルヘルス問題のある親による子ども虐待－その実態と支援課題」と題して、メンタルヘルス問題のある親と子ども虐待の関連性、その支援体制上の問題点、先駆的支援活動例にみる支援のポイントと今後の課題、を中心にお話しいただきました。

シンポジウムでは、メンタルヘルス問題を抱える家族の支援に関わる各方面の方々にそれぞれのテーマでお話しいただきました。

まず、三重県立小児診療センターあすなろ学園の金井剛園長には、精神科医として児童相談所で15年勤務した経験から、「子どもと親の精神科、児童精神科医から見た子ども虐待の背景と課題」と題して、子ども虐待の背景の理解と、虐待がもたらす影響、また、虐待者、精神に障がいのある方との接し方、再統合、医療機関との連携についてお話しいただきました。精神科治療については、生育歴や生活歴など虐待者の背景にあるヒストリーを理解すること、生活のどこに「差し障り」があるかを見て、診断名よりも「困り感」と「支障」軽減を目的として治療を進めていくことの重要性について説明いただきました。

児童精神科の看護師として15年間勤務し、現在は鈴鹿医療科学大学看護学部の准教授であり、『親＆子どものサポートを考える会』を運営する土田幸子氏には、子どもたちへのアンケート調査とインタビューをもとに、「精神に障がいのある親に育てられた子どもたち　～子どもの語りと調査から浮かび上がってきた支援～」をテーマにご報告いただきました。メンタルヘルス上に課題のある親を持つ子どもたちでも、子ども時代をどう過ごしたかは多様であり、生きづらさを感じる子どもたちと、自分らしさを保て

ていた子どもたちがおり、そこにはどんな違いがあったのかなど、子どもたちが求めていた支援の実情について報告がありました。

沼津市市民福祉部福祉事務所こども家庭課の笹井康治氏からは、行政の立場から、要対協がメンタルヘルス問題を抱えた家庭にどう関わり支援していけるか、「要保護児童対策地域協議会におけるメンタルヘルス問題を抱える保護者対応の実態と課題」と題してお話しいただきました。要対協が支援する家庭の大部分はネグレクトかつ在宅ケースである中、実例を交えながら、実際の支援の難しさや、なかなか医療機関へ繋げられないジレンマなどについても紹介していただきました。

最後に、児童相談所での勤務経験が長く、現在は児童養護施設と乳児院の施設長を務める神奈川県立中里学園の土橋俊彦氏から、「子どもの支援現場から考える児童相談所、児童福祉施設、精神科医療機関の連携の実際と課題」と題して、児童相談所の実情やワーカーが抱えるジレンマの紹介、親支援に関しては要対協や医療機関、広く支援組織間の連携や情報共有による支援体制作りの必要性などについてご報告いただきました。従来の児童相談所の保護者支援の限界についても触れられ、その人の持つ「ストレングス（強み）」に着目した、「リスク」だけでなく「ニーズ」を支えるアプローチの重要性について触れられました。

第三部として実施したパネルディスカッションでは、各登壇者から、「メンタルヘルス問題のある親には子育てができない」と決めつけるのではなく、「親子が一緒に暮らしていくため」に、福祉と医療と自治体が連携した、長期的な視点での支援の必要性が説かれました。子どもと親へのエンパワメントの大切さ、支援者のチームマネジメントという視点も、支援者や関係機関へ共有したい点として示されました。また、パネルディスカッションでは、会場からの質問や感想を受ける形で、登壇者がそれぞれの立場や視点から、回答やアドバイスが行われました。

補足）シンポジウムの中身（詳細）については、実施報告（全体版）をご覧ください。